

# 春

# 燈



4月号

## 櫻桃子の句

# 漂泊といふ語と秋の暮を愛す

句集『風色』昭和四十八年

「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」奥の細道の冒頭だ。古来、詩人にとって漂泊への思いは深い。しかしながら、叶わぬ夢とあきらめざるを得ない現実は、漂泊という「語」を愛すしかないのだ。「秋の暮」はあこがれとしがらみの狭間なのだろう。死をもって漂泊の旅に発たれたと思うならば哀切すぎるが、自分に重ね合わせたとき、この句を愛誦する所以がここにある。

近藤 牧男

# 櫻桃子の句

## 焼跡の東京広し月見草

現代俳句文庫―十九『成瀬櫻桃子句集』昭和二十年

今年「春燈」は華甲の年を迎えた。かつて東京の焼跡に立ち、これより久保田万太郎を擁し、「影あつてこそ」の形、家常生活に根ざした即興的な抒情詩」の下で「春燈」の灯を点し、東京の空、足元の月見草の花に心を託し、秘やかに世に出でんとの闘志の感じられる句と受けとめられる。以後、万太郎、敦の抒情に知を絡ませ人生の哀歡を詠われた師の若き日の一句が心に残っている。

佐橋敏子

# 西ヶ原日記 (十七)

鈴木榮子

針 供 養 佐 助 の 針 は 誰 が 納 む

小 指 ほ どの 東 京 タ ワ ー 寒 夜 かな

フ エ ル ト ス リ ッ パ 春 の 弾 力 赤 ぞ つ き

恋から愛に替るごと金の鸞替へて  
ひたひたと寄す春愁の渚かな  
江の島といふ終点の春の海  
出雲ばし長谷川画廊新春展  
水族館の中のクリオネ春の水  
恩賜の短剣逢つて別れてさくら季  
薔薇買はな薔薇二打ダースと言ひ放ち

太田 佳代子

早春や波引くあとを砂が追ふ  
海の風光る真砂女の忌なりけり  
歩き出せば遠き目となる遍路かな  
春の水日陰に深さ増しにけり  
振返る海に音無し春の昼  
大川のみづの膨らみ夏燕  
さざ波の一枚ごとの代田かな  
夕さるや明日へ吹きそむ代田風  
あぢさゐの葉の押上ぐる花の数  
たいくつな日や口元へさくらんぼ

白玉や母ある頃の反抗期  
日盛りを歩むほかなく歩みけり  
傘一本のこる大甕蟬時雨  
母のぬし町片陰の多き町  
ふるさとや暮れゆく夏の日の重さ  
後退る波ばかり見て秋の浜  
研ぎし米平らに均す良夜かな  
息を吐くたびに眠りへつく良夜  
山茶花やさみしくはなき距離をおき  
本抜けば本寄りかかる今朝の冬  
影のごと八手の花の隣り合ふ  
数へ日のその一日の暮れゆきぬ  
夕映えや水のしたたる鴨の嘴  
合挽きの肉練りつづく冬の夜  
空壇に硬貨落して冬ぬくし

## 人魚の像

阿部 泰子

冬の風人魚の像を一と囲り  
衿巻して人魚の像の前にイッ  
寒さうな人魚の像にシャッター切る  
冬の波人魚の像を美しく  
冬日和鰯の酢漬け鮭さし身  
ブリッジのたけなは刻を忘る冬  
冬の風コペン銀座を通り抜く  
冬日射すロイヤルコペンの手描きの筆  
アベツクのチボリ公園冬夕焼  
ホテル冬友と別るるデイナーかな

## 竹 瓮 舟

寺 村 年 明

鳶の笛山眠らせてゐたりけり  
一棹に落日を追ふ竹瓮舟  
ありたけの糸曳きずつて放れ風  
放れ風点となるまで兄いもと  
ぼろ市に探す打ち出の小槌かな  
誰かゐる障子に声をかけにけり  
日溜りの雀のはづむ鳥総松  
本当は人間が好き雪女郎  
咳一つ残つてゐたる留守電話  
鈴音の投げこまれたるどんだかな

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 植竹惇江

鸞替や金の鸞手に美しき人

針供養女の業もさされけり

探しもの見つからぬまま春立ちぬ

持ち慣れし杖の手光り春隣

ビル風に落葉の如く飛ばされぬ

○ 生方義紹

玉の緒の丈の絶えざる去年今年

喰積の与之重までの彩の奢侈

明治帝の御製の軸に淑気あり

Kさんの逝かぬつもり年の賀状

馬日かな口笛の愛馬進軍歌

○ 藤田信義

初詣良かれと祈る句と仕事

山茶花や今がさかりと見つつ過ぐ

駅前の鳩も寄り来る御慶かな

又急ぎ原稿送ります初電話

成人式どの子もしかと進路もつ

○ 上野進

寒卵長子生涯娶らずや

霜柱啼かせて故郷を発つ一步

居心地の良き喉らしや春の風邪

後ずさる農夫畦火の手を引いて

焼芋屋かはたれどきを出陣す

○ 後藤眞由美

唐墨の割るる音高き寒夜かな

I Tの乾闥婆城雪しまぐ

音を吸ひ音をつつみて雪降り

日脚伸ぶ影が翳生む江戸組子

地下水路の迷宮に春かくれをり  
(首都圏外部放水路)

# 春燈の句

鈴木 榮子選



冬さぶや垂れて重たき縄暖簾

カナダ 廖 運藩

寒紅の二色を合はせ己が色

寒蘚や拓民難碑の日本文字

しののめの条雲赤き冬の街

息災を賀状に托す疎遠かな

携帯メールの寒中見舞もらひけり

冬霧や出で湯の里の古戦場（明治七年征台の役）

鶯餅ひとつ分けあふ二人かな

ときめきの幾つか欲しき初暦

栃木 内野 俊子

身の丈に合ふくらしなる春灯

けふの顔まあそれなりに初鏡

都会つ子の雪だるますぐ溶けにけり

ほのぼのと春の七草椀の中

大寒の首ぎくしやくと気難し

着ふくれて文学少女健在なり

ものの芽や吾子の細胞増えつづけ

母の忌の多摩の横山眠りをり

地球規模の不幸助けむと竜天に

悴みし十指に十指重ねけり

小晦日オフの舞妓のマニキュア

白鳥と一緒に動く親子連れ

不義理一つ二つ三つ四つ除夜の鐘

雪に暮れ水平線の失せにけり

垣越に竹馬の子の諍へる

無伴奏チエロ組曲や雪乱舞

神奈川 荒井 慈

青木の実飛んでこいこい赤い鳥

声弾むアメリカよりの初電話

木の葉かと思れば戯る寒雀

気がつけば七草爪を切りておし

風邪に臥し妻が靴音確かめり

愛知 後藤 大

埼玉 佐々木 新

神奈川 沼田 桂子

千葉 三代川玲子

# 余言

鈴木 榮子

大店や町内一の松飾

中村春宵子

作者は日本橋三越前の山本海苔店の方である。まさに大店中の大店、日本橋は個人の老舗が集まっていた。その中でも山本海苔店は有名である。

暮になるとその地区担当の頭がお正月の門松の段取りに来る。大店には欠かせない正月用意である。まして店は三越本店の真前である。例年のことながら町内一の松飾を設えなければ、店構えからしてもまた日本橋大通の人通りに対しても、これはと言うほどのものを飾りたいところである。

寒紅をさすも昨日とおなじ顔

高埜 良子

寒紅の句として極めて素直で、しかも寒紅の句としてはめずらしい。そして好ましい。寒紅は引く、差す、塗る、とその先は言わない方がよいと言われて来たが、この場合はその婦結が素直で尤もで、よく日常のなに気ないことを詠まれている、とても心持よい。

針山へ母の娘の針納めけり

高埜 良子

同じ作者の句である。母の娘の針納めけり―がとてもよい。私が女だからであろうか。

母の使う針と娘の使う針は自然と異なる。そういうなに気ないことをおとなしく詠む作者の詠み方をよしと思う。(以下略)

玉の緒の丈の絶えざる去年今年

生方 義紹

式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする」を受けての玉の丈である。

歳の果に「あゝ今年も無事息災」であったと思う感慨があったのである。まだそれを思うにはお若い方であるが、ある歳を越えると自分で自分の人生の心づもりがなんとなく思われる。人生五十年、いまは七十年、さてと思わないことはない。

然し春燈の鈴木真砂女様は七十歳を越えてからエッセイ執筆を依頼されたり、読売文学賞に輝く句集も出版された。

九十六歳で他界されるまで立派に余生を全うされた。